

# 幼児期のボール遊びを通じた協働性の育成に関する研究

## —バルシューレを導入した実践—

加賀屋綾乃 (岩手大学)

### 1. 目的

学習指導要領には小学校低学年でボールゲームが学習内容として示されているが、それを充実させるためには小学校就学前からボール遊びの経験や集団で課題を達成するという経験を積み重ねていくことが意義のあることと考えられる。本研究では、幼児期のボール遊び、特にバルシューレを通じた協働性の育成に関する検証を行うこととした。

### 2. 研究方法

#### (1) 対象幼児

岩手大学附属幼稚園園児、年長組のT組（男10名、女14名）及びK組（男9名、女14名）を対象とした。

#### (2) 使用物品

①風船、②molten ソフトバレーボール 30g、50g、100g

#### (3) 遊びの概要及び分析項目

一斉遊びの時間に集団で協働したボール遊びを行い、その様子を観察した。説明する際には補助の教員と共に実際に行うことで視覚的にわかるようにし、内容の理解を図った。幼児の様子から段階に合うものになるよう変化させていった。「風船運び」と「3人ボール運び」は各1日のみ、「直線ボール運び」は3日間行った。これらの内容をOECDで発表された社会情動的スキルのフレームワークをもとに、今回のボール遊びでは「学びに向かう力」を「好奇心・自己主張」「協調性」「がんばる力・自己抑制」の3つの項目にして分析を行った。

### 3. 結果と考察

#### (1) 風船運びについて

1人で風船を操作したり、一方で全く風船に触れなかったりなど遊びの様子に差が出ていた。結果として好奇心・自己主張、協調性、がんばる力・自己統制のすべての項目において一人一人を個人で分析するまでの遊びに至らなかった。また、全体として

それぞれの項目に当てはまる言動や行動はほとんど出現しなかった。

(2) 「3人ボール運び」と「直線ボール運び(1日目)」の比較

「3人ボール運び」と「直線ボール運び(1日目)」の「学びに向かう力」について系統的な違いを明らかにするため、2水準を対応させたサイン検定を行った。その結果、18名中、+が13名、±0が3名、-が2名となった。

(3) 「直線ボール運び」を1日目と3日目で比較

「直線ボール運び」の1日目と3日目の「学びに向かう力」について系統的な違いを明らかにするため、(2)と同様に2水準を対応させたサイン検定を行った。その結果、17名中、+が11名、±0が5名、-が1名となった。

今回開発した3種類のボール遊びを通して「学びに向かう力」が有意に向上したことから、協働したボール遊びの開発にバルシューレを導入することは有効であったといえる。バルシューレの段階構造が子どもの実態に合わせて変化させるうえで効果的であった。バルシューレの段階構造を参考に次の遊びを構想することは、臨機応変に対応をすること繋がっていた。子どもたちの段階に合わせてみんなができる遊びを探っていくことで「ボール遊び」への意欲に繋がっていたと考える。

### 4. 結論

本研究では、開発した3種類のボール遊びから検討した結果、以下の知見が得られた。

①全員で達成するボール遊びによって幼児の協働性を育む有効性が示唆された。

②ボール遊びにはストーリーのある設定の有効性が示唆された。

③3人の遊びの難しさは技能の問題ではなく、社会性の未発達が大きな要因であることが考えられた。

④バルシューレの幼児の協働性を育む可能性が示唆された。